

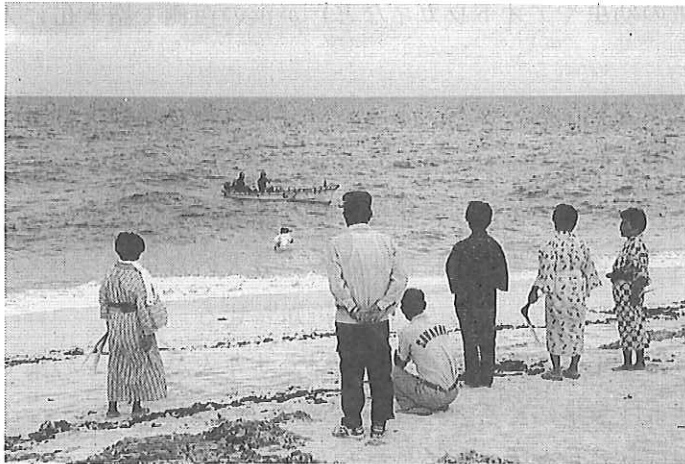
〈短報〉 変容する来間島のムスヌン(虫払い)行事

写真家・金子 進

毎年旧暦4月のひのとうしに害虫追放とその年の豊作を祈願するムスヌンが下地町来間島で行われている。この行事が来間島に青年の人口が少ないことから、少しずつその姿を変えようとしている。

ムスヌンは酉、卯、亥年生まれの男性3人が行事の前日に集めた蛾の幼虫やアオドウガネなど害虫を当日の朝、来間島の南にあるムスヌン浜で焼く。焼かれた害虫を、酉、卯、亥年生まれの青年が満潮にあわせて泳いで行き、浜からおよそ300メートル離れた大きな海岩の下に置いてくる。引き潮になれば虫は島から遠ざかる。

1998年、従来通り泳いで虫を運んでいたうちの1人が海岩からの復路、両脚が痙攣し溺れそうになったことから、翌1999年のムスヌンから青年たちは泳がず、手こぎのボートで海岩まで虫を運ぶ方法に切り替えた。



1999年5月25日 この年からボートを使うようになった
出たが、結局ボートで運ぶことに決まった。

2000年5月19日午前8時、満潮に合わせてムスヌンの準備が進められた。害虫が焼かれ、4人のツカサたちが集まる。この間浜では今回もボートで運ぶか否かの話があった。「伝統を変えない方がよい」。ボートを待機させ危険な状態になったら助けに行くという折衷案も

1998年を最後にボートに切り替わり、今後もこの形が継承されていくと地元の人たちは見ている。

この背景には来間島も過疎化が進み島内に青年が少なく、虫を運ぶ役割の高齢化が進んでいるという事情がある。2000年5月末日現在、来間島の20歳代の男性が8人、30歳代が13人、40歳代が13人(下地町役場住民課)。この中で酉、卯、亥年生まれとなるとさらに数が限られる。その役割をこなせる若者がいないのが現状だ。

伝統文化を継承しその原型を保つことは意義のあることだろうが、この行事に参加

した住民たちの中から「文化はその時代の背景によって徐々に変化してもいい」という意見がある。

ある種独特な祭祀や御願など、宮古島で継承されている伝統文化が変容又は消滅することは、筆者のように沖縄県外で生まれ、人生の大半を過ごした人間がそれに触れたとき、一抹の寂しさは禁じ得ないが「これは大切な文化だから、復興又は原型を保つべきだ」と強要するのは、その時代やその神事を司る地域の人たちの気持ちを無視したワガママでしかないのだろう。

ムスヌンをすること自体が大切なのだという地域住民の気持ちがこの神事の根幹にあることが重要で、形に固執するあまりその地域住民の気持ちや時代を反映しないことは、むしろ伝統文化の形骸化の始まりではないだろうか。

2000年のムスヌンの概要

2000年5月19日午前7時、来間島の南にあるムスヌン浜に地域の住民たちが集まり始める。この日の午前中の満潮は午前8時。

前日から集められた害虫（蛾の幼虫やアオドウガネなど）が浜の西側で空き缶に入れられ焼かれる。

午前8時前、4人のツカサ（ツカサ・ユーザス・トゥムンマ）たちが祭場に到着。ビニール袋に移された害虫を海岩まで運ぶ役割の青年たち3人は、浜からボートをおろしゆっくりと岩に向かう。その姿を浜に集まった住民たちは静かに見守る。

海岩に到着しビニール袋に入った害虫を岩の下に置いた後、3人の青年うち1人が大きく両手を振り無事に役目を果たしたことを浜の人たちに知らせる。

午前8時20分すぎ、浜に戻った青年3人を、そこで待つツカサ4人がアダンの葉で作ったマータで魔よけをして神事は無事に終る。

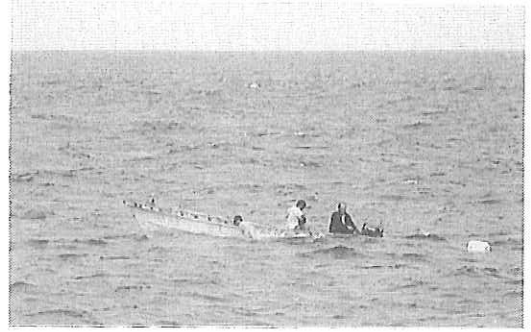
午後の宴までの間、その年選ばれた集落青年部の役員たちはその場に残り、宴の式次第や会場設営の準備をする。

午後1時30分すぎから、浜の西側の広場に作られた会場に地域の住民はもとより、下地町の町長はじめ三役、来間小中学校の校長、教諭などが集まり祝いの宴が始まる。

来間島の住民のほとんどが参加し、その席では来間小中学校の児童・生徒やPTA、婦人会などが踊りや遊技を楽しみ、祝いの座は夕方まで続く。



①害虫を空き缶に入れて焼く



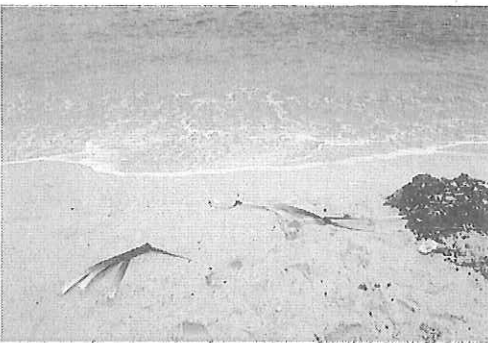
②ビニール袋に入った害虫を海岩に置く



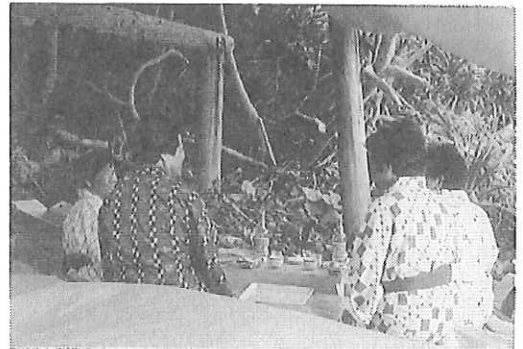
③海に出た青年たちを見守るツカサたち



④アダンのマータで魔よけをする



⑤マータを海に流す



⑥終わりの御願



⑦祝宴が始まる



⑧子どもたちも参加し、余興を楽しむ